

彗星課月報

Monthly Report of the Comet Section, November, 2004

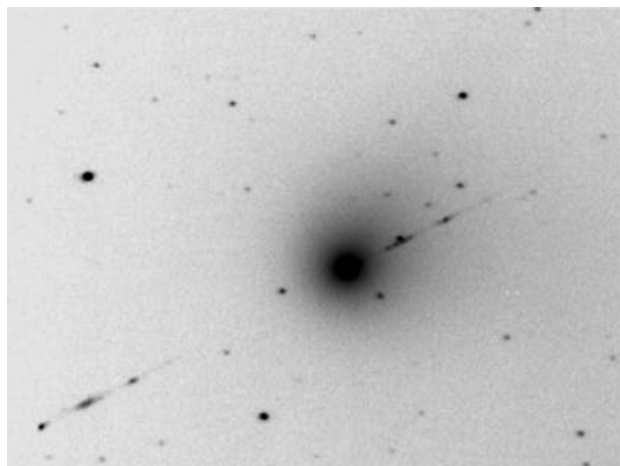
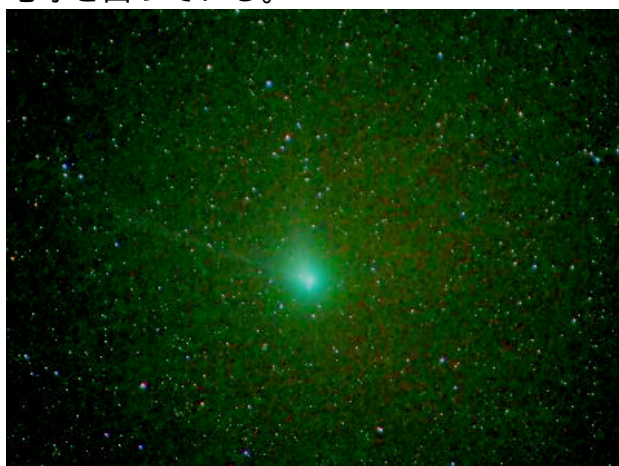
課長 関 勉 T. Seki 幹事 佐藤裕久 H. Sato
幹事 松本敏一 T. Matsumoto 幹事 江崎裕介 Y. Ezaki

11月の状況 (佐藤)

C/2004 Q2 (Machholz)

C/2004 Q2 は 11 月中旬ごろより北上し始め、光度は順調に増してきており双眼鏡的彗星になってきた。南半球ニュージーランドの John Drummond は、Canon EOS 10D に f.l.480mm f/5.6 レンズをつけてダストの幅広い尾と細く長いイオンテイルを撮った(写真 a)。

11月21日、高知市の下元繁男氏が徳島県塩塚高原キャンプ場で撮影した画像には、C/2004 Q2 のコマに人工衛星が串刺しのように通過した面白い画像を得た(写真 b)。この衛星は、分離に失敗した日本の人工衛星 2002-003B DASH (Demonstrator of Atmospheric Reentry System with Hyper Velocity: 高速再突入実験機)で円盤状の衛星カバーに固定された状態で地球を回っている。



(写真 a) C/2004 Q2 (Machholz) 2004,11,19.58 UT
Canon EOS 10D + f.l.480mm f/5.6 lens exp. 17x1-3 min.

© John Drummond Gisborne, New Zealand

(写真 b) C/2004 Q2 (Machholz) 2004,11,21
1h 53m 39s (exp.30s) + 1h 54m 47s (exp.30s) JST

高知市 下元繁男氏 (撮影地:塩塚高原キャンプ場)

C/2003 K4 (LINEAR) (写真 c)

近日点通過後の 11 月 7 日の明け方(日本時間)、芸西天文台の関課長と上尾市の門田健一氏によって国内では 2 ヶ月半ぶりに再観測された。どうやら非重力効果が出始めたようだ。

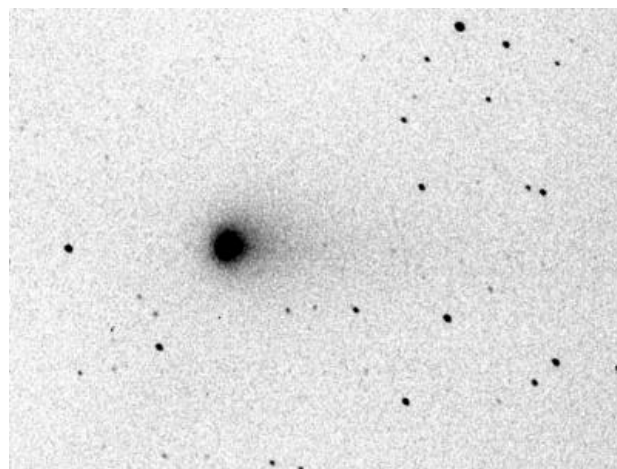
次の軌道は高知市の村岡健治氏が 2003 年 5 月 28 日から 2004 年 11 月 23 日までの 2818 個の観測から決定したものである。

Epoch =	2004 Oct. 2.0 TT	JDT =	2453280.5
T =	2004 Oct. 13.71733	+/-	0.00010 (m.e.) TT
Peri. =	198.44086	+/-	0.00013
Node =	18.67527	+/-	0.00004 (2000.0)
Incl. =	134.25272	+/-	0.00001
q =	1.0236208	+/-	0.0000018 AU
e =	1.0002792	+/-	0.0000019
1/a =	-0.0002728	+/-	0.0000018 1/AU

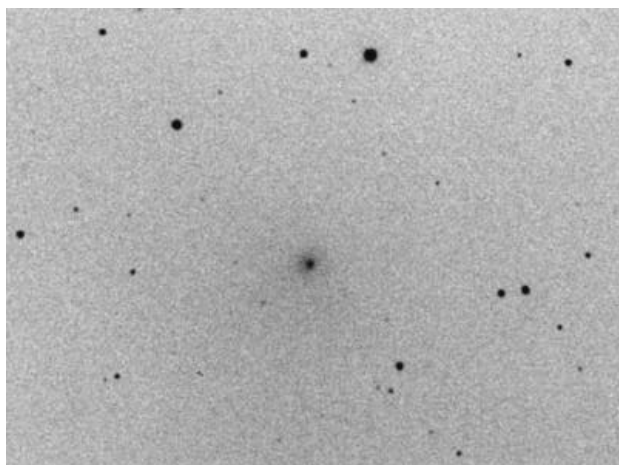
$A1 = +1.097$ $+/- 0.115$
 $A2 = -0.80402$ $+/- 0.15120$
 $orig. 1/a = +0.0000242$



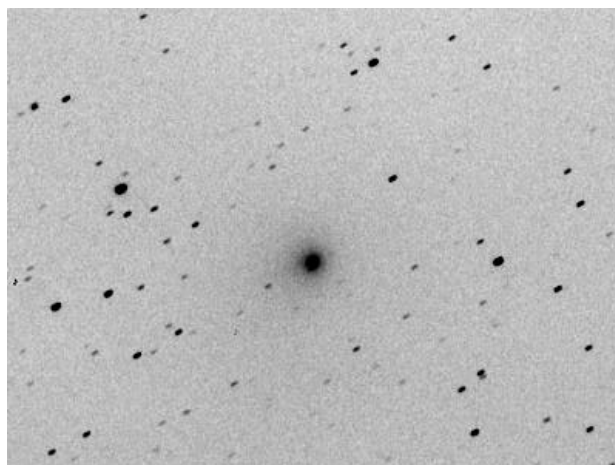
(写真 c) C/2003 K4 (LINEAR) 2004,11,13
 5h 16m ~ 19m (JST) exp. 3m 60cm L + T-Max film
 芸西天文台 関 勉



(写真 d) 78P/Gehrels 2 2004,11,17
 0h 42.0m ~ 53.2m (JST) exp.120s x4 25cm L + CCD
 三重県上野市 田中利彦氏



(写真 e) 29P/Schwassmann-Wachmann 1 2004,11,16
 21h 10.0m ~ 19.1m (JST) exp.60s x5 25cm L + CCD
 三重県上野市 田中利彦氏



(写真 f) C/2004 Q1 (Tucker) 2004,11,16
 21h 42.0m ~ 49.2m (JST) exp.60s x4 25cm L + CCD
 三重県上野市 田中利彦氏

その他比較的明るい彗星は、78P/Gehrels 2(写真 d)、29P/Schwassmann-Wachmann 1(写真 e)、C/2004 Q1 (Tucker)(写真 f)、C/2001 Q4 (NEAT)や 32P/Comas Sola などであった。

2004年11月に発見された他の彗星は次のとおり。

P/2004 V1 (Skiff)

LONEOS サーベイのプログラムコースで Brian Skiff が発見した。10月7日と18日に LINEAR が独立発見した観測があり約10年の周期彗星であることがわかった。(IAUC 8426, 2004 Nov. 4)

161P/2004 V2 (Hartley-IRAS)

P/1983 V1 を Siding Spring 天文台の R. H. McNaught が検出した。(IAUC 8428, 2004 Nov. 5)

P/2004 V3 (Siding Spring)

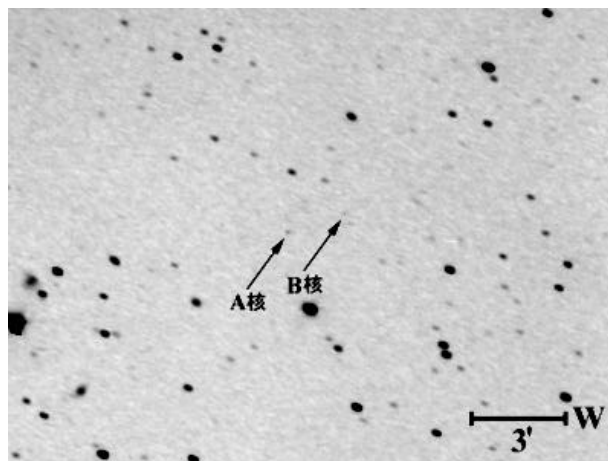
Siding Spring サーベイのプログラムコースで発見された小惑星状の天体が他の観測者によって彗星と判明。(IAUC 8429, 2004 Nov. 6)

P/2004 V4 (NEAT)

NEAT サーベイのプログラムコースで K. J. Lawrence が発見した。その後、約7年の周期彗星であることがわかった。(IAUC 8429, 2004 Nov. 6)

P/2004 V5 = P/2003 YM159 (LINEAR-Hill)

LINEAR と Catalina サーベイのプログラムコースで発見された。2003年の2夜に小惑星状と報告されていたが見失われていた。その後、Catalina の Rik Hill によって分裂した彗星として再発見された。当初 LINEAR- Catalina と命名されたが LINEAR-Hill と改められた。(IAUC 8433, 2004 Nov. 10)



(写真g) P/2004 V5 = P/2003 YM159 (LINEAR-Hill)
2004 Nov. 16.736 UT exp. 300s x8 25cmL + CCD
上尾市 門田健一氏

162P/2004 TU12 (Siding Spring)

Siding Spring サーベイのプログラムコースで小惑星状の天体として発見され、小惑星センターによって1990年から2003年の観測にリンクされていたが、2004年11月、他の観測者によって彗星と判明。(IAUC 8436, 2004 Nov. 12)

C/2004 RG113 (LINEAR)

LINEAR サーベイのプログラムコースで発見された。小惑星センターによって小惑星状天体 2004 RG113 であることが判明。(IAUC 8444, 2004 Nov. 23)

次の眼視観測がある。

C/2004 Q2 (Machholz)

2004	UT	m1	Dia	DC	Tail	p.a.	Trans.	Seeing	Instru.	Observer	Note
Nov.	9.77	7.2	8	6	-	-	-	-	16x 7cmB	宇都宮章吾	
	16.70	6.5	-	-	-	-	-	-	60x20cmR	関 勉	
	20.68	6.4	12	5	-	-	3/5	6/10	10x 7cmB	佐藤裕久	

C/2003 K4 (LINEAR)

2004	UT	m1	Dia	DC	Tail	p.a.	Trans.	Seeing	Instru.	Observer	Note
Nov.	4.85	7.5	2	4	-	-	-	-	25x15cmB	宇都宮章吾	
	6.85	7.5	3	4	-	-	-	-	16x 7cmB	"	
	12.85	6.5	8	-	-	-	-	-	60x20cmR	関 勉	1
	20.81	7.3	4	4	-	-	2/5	3/10	10x 7cmB	佐藤裕久	
	22.83	7.5	4	4	-	-	2/5	5/10	10x 7cmB	"	
	23.85	6.5	-	-	-	-	-	-	60x20cmR	関 勉	

Note: 1 西(p.a.270°)に尾。太陽方向(p.a.45°)にアンチテイル。

78P/Gehrels 2

2004	UT	m1	Dia	DC	Tail	p.a.	Trans.	Seeing	Instru.	Observer	Note
Nov.	9.78	10.2	1	4	3	-	-	-	25x15cmB	宇都宮章吾	